

エッセイ 上達のヒケツ!

創作ビギナーに告ぐ

安東みきえ

今回の執筆依頼、仮題は「上達のヒケツ、わたしはこれで上手くなった!」ということだったので「そんなものがあつたら私が知りたい」と居直ろうかと思った。

しかしそれも情けない。そうでなくても注文に先細り懸念のある昨今、せっかく頂いた仕事は引き受けたものだ。

執筆を決意して机の前に座る。しばらくはパソコンをにらみ、鉛筆を鼻の下にはさんで白目をむいて考えてみる。が、何も浮かばないので気分転換とばかりテレビの前に陣取る。テレビに飽きると脳への糖分補給と称して饅頭を頬張る。さすがにそろそろ書かねばと机に戻ってようよう一行書いてみる。次にそれを書き直す。また一行書く。今度

はそれを削除する。少しも上手く書けないのに嫌気がさし、ついにベッドに身を投げてふて寝する。

たいがいそんな調子である。もしもトカゲの尻尾の黒焼きが文章上達のヒケツと聞けば、私は網を手にして外に飛び出すだろう。ヤモリとなると難しいが、トカゲならば脅せば容易に尻尾をよこす。それで名文を我が物にできるとなれば、何をためらうことがあるだろう。

と、このへんで読者はもうお気づきのはずだ。

二〇年も書いている私がこのままである。創作ビギナーのみなさんが上手く書けなくても当たり前だと言いたい。パワハラ満載のスポ根漫画よろしく、とにかく書いていくより他ないではないか。七転八倒しながら文を綴るのである。才能があるとかないと考えない。たとえ公募に落ちまくっても、たとえ友人に後ろ指をさされても、たとえ自分は馬鹿かもしれないと気づいても、とにかく一文字一文字を血文字のようにしたためていくしかないのではないか。創作に憑りつかれたのが身の不運とあきらめ、おのれのヘタクソぶりに反吐を吐きながらでも書き続けるのだ。

ただ、逆に上手く書けると思えた時は要注意、とそれだけは進言できるかもしれない。経験上、サクサクと筆が走っている時は読み手への配慮が欠けている場合が多いものだ。読者のことなどほとんど意に介さず、自分だけが悦に入ってしまったらぬものを機嫌よく書いているのである。